

山の畑(はたけ)プロジェクトの成果と課題

名古屋市立大学大学院人間文化研究科 三浦 哲司

一 御剣学区にとつての

滝子キャンパス

本学の滝子キャンパスが位置するのは、名古屋市瑞穂区の御剣学区である。滝子キャンパスにはかつて旧制八高が存在し、その校舎は御剣学区の方々にとつて地域のシンボルのような存在であった。彼らのなかには、幼少時代に旧制八高の敷地内の庭や噴水で遊んだ記憶を持つ人も少なくない。

戦後は名古屋大学瑞穂分校の時期を経て、一九六五年に現在の本学滝子キャンパスとなった。この半世紀を振り返ると、本学と御剣学区との交流・連携が盛んに行なわれてきたとは言いがたい。確かに、御剣学区のコミュニティセンターにおいて、個々の学生団体(特に音楽系の団体)が練習の成果を発表するなどの接点があった。ただ、いずれも単発の内容が中心で、本学と御剣学区とで恒常的に何かの取り組みを連携して行なう性格ではなかった。

もつとも、滝子キャンパスは御剣

学区の方々にとつての避難所に指定されている事情もある。災害時の応急段階で迅速に連携・対応しようとするならば、大学関係者と御剣学区の方々とは、日ごろから相互に親密な関係を築いておく必要がある。こうした事情をふまえ、二〇一六年二月からプロジェクトの発足に向けた準備を進め、同年六月より本格的に「山の畑(はたけ)プロジェクト」を開始させた。

二 プロジェクト発足の経緯

山の畑(はたけ)プロジェクトの発足の経緯は、二〇一五年一二月に開催した「御剣学区のみなさんと名

市大生とのおしゃべり茶話会」(主催・名古屋市立大学)におけるワークショップにさかのぼる。この企画は、本学と御剣学区の連携を深める一環として二〇一四年一二月から始まり、毎年一回開催している企画である。二〇一五年度は、事務局学生課学生支援係が企画し、筆者がコーディネーターを担当した。この企画

において、学生と住民が「どのような活動であれば一緒に取り組むことができるか」について話し合うなかで、「大学と学区とで協力し、滝子キャンパス内の遊休地を活用して、野菜作りのような取り組みができないか」という意見が出た。

その後、学生支援係が主導し、筆者も参加するかたちで、御剣学区の方々との話し合いを重ねていった。あわせて、滝子キャンパス内を散策し、農作業が可能な遊休地の選定も進めていった。その際、「一定規模の面積が確保できる場所であること」「日当たりがよい場所であること」「近くに水道の蛇口が確保できる場所であること」「できる限り門に近い場所であること」「授業や研究の妨げにならない場所であること」「作業中に事故が起こらない安全な場所であること」といった点に留意した。

二〇一六年二月には、学生支援係の発案で「山の畑(はたけ)プロジェクト」という名称が決まった。この名称に関しては、本学滝子キャンパスの通称が「山の畑キャンパス」であり、これを活かして学生や教職員の大学への愛着を高めることをねらいとしている。その後、学生支援係が作成した企画案も全学会議で承認され、機材の購入も済ませた。

このように、二〇一五年度内にはある程度の準備が整った。

二〇一六年度に入ると、四月には学生支援係長と筆者とで、あらかじめ御剣学区の方々と会合を重ね、基本的な方向性を確認した。このときには、「初めから大々的に多品種の野菜作りに取り組むのではなく、まずは実現可能性を最優先してサツマイモを中心に栽培する」という点を確認している。また、「水やりなどの作業は、活動しながら大学側と地域側との役割分担を決めていこう」という点も確認された。

二〇一六年五月には再び大学側から企画書を御剣学区の方々に提示し、覚書を交わしたうえで、取り組みの方向性を再確認している。また、この時期には上記の条件に照らし合わせ、紆余曲折の末、実際に農作業を行なう遊休地も滝子キャンパス内のトレーニングルーム前に決まった。こうした経緯を経て、二〇一六年六月七日（火）一六時三〇分より本プロジェクトのセレモニーを開催し、活動を開始するに至った。

三 二年間の活動と広がり

上記のとおり、本プロジェクトの名称は「山の畑（はたけ）プロジェクト」である。御剣学区の方々と名

市大生とが共に汗を流しながら農作物を育てることで、双方のつながりを強化し、継続的に交流していく地域貢献活動として位置づけている。「トレーニングルーム前の遊休地を活用して畑を作る」「御剣学区の方々と学生とで協力してサツマイモを栽培する」「収穫したサツマイモを活用して、さらに交流を深める」の三つを基本とし、期間は二〇一八年度までの三年間と設定してある。

この活動を通じ、大学側には学生の愛校心の醸成、地域貢献の経験の蓄積、多世代との交流、環境問題への関心の醸成、などが期待される。二〇一六年度に関しては、本プロジェクトを通じて、サツマイモ畑づくりと苗植え、日ごろの水やりと草刈り、サツマイモの収穫、市大祭での焼き芋販売、タマネギ畑づくりと苗植え、次年度に向けたサツマイモ畑づくり、といった多様な取り組みを進めてきた。同時に、これまで続けてきた防犯パトロールへの参加、おしゃべり茶話会の開催も継続することができた。さらに、こうした一連の活動から御剣学区の方々と学生との交流の機運が高まり、盆踊り大会や餅つき大会の支援という新たな関わりも始まった。

二〇一七年度に関しては、本プロジェクトを通じて、サツマイモの苗

植え、タマネギの収穫、日ごろの水やりと草刈り、ジャガイモ畑づくりと苗植え、サツマイモの収穫、タマネギ畑づくりと苗植え、市大祭でのサツマイモスティック販売、ジャガイモの収穫、などを展開した。また、御剣学区の方々の協力を得て、防犯パトロールへの参加、御剣コミセン給食会への参加、盆踊り大会の支援、御剣学区コミセン祭への参加、おしゃべり茶話会の開催などにも取り組んだ。

とりわけ、市大祭でのサツマイモスティック販売に関しては、大学側と御剣学区とで何度も会議を開き、試作品作りや試食会を重ね、万全の準備を期した。十一月一日（土）から始まった市大祭では、御剣学区の方々と人文社会学部の学生で調理と販売を担当し、常に長蛇の列ができるほどの盛況ぶりであった。販売日は市大祭の一日目のみであったが、一〇時からの販売開始から三時間ほどで用意した一八〇カップが完売している。

このようにみてみると、活動期間は二年ほどではあるものの、すでに当初の想定よりも活動幅が広がっていることがわかる。当初はサツマイモのみの栽培を予定していたが、タマネギやジャガイモなど品種も増え、いずれも大量に収穫することができ



た。収穫されたサツマイモ、タマネギ、ジャガイモは御剣学区のコミュニティセンターで開催される給食会に使用され、本学の学生もこの会に参加して地域の方々と交流するという新たなうごきも出てきている。

四 プロジェクトの成果と課題

ここまでみてきたように、山の畑（はたけ）プロジェクトは二年間の活動を通じて、一定の成果をあげることができたといえる。具体的には、以下の三点があげられる。第一は、「収穫したサツマイモを市大祭で焼き芋にして販売する」という当初の目標を達成できた、という点である。二〇一六年度は収穫したサツマイモの一部を焼き芋として、二〇一七年度は収穫したサツマイモをサツマイモスティックに調理して、それぞれ市大祭にて販売することができた。特に、二〇一七年度に関しては、大学側と御剣学区とで調理から販売までを共同で実施したことで、連携・交流がより深化したように思われる。

第二は、本プロジェクトの取り組みを学内外に広く発信できた、という点である。活動当初は、本プロジェクトの情報発信はさほど念頭に入れてはいなかったのが事実である。そうしたなかで、学生課や企画広報課の尽力により、苗植えや収穫の様子

子は新聞等でたびたび報道されてきた。また、御剣学区や学内の広報誌でも、地域と大学との共同作業としてさまざまなかたちで発信された。

第三は、本プロジェクトに関わる学生が御剣学区の活動に参加するうごきが生じた、という点である。毎月開催される防犯パトロールに加え、御剣学区の行事として八月に開催される餅つき大会、十一月に開催される餅つき大会には、本学の学生も参加し、会場設営や運営で御剣学区に協力することができた。こうしたうごきは、本プロジェクトを通じた関わりがなければ、おそらく生じなかったものと推察される。

もつとも、二年間の活動からは、さまざまな課題も見えてきた。具体的には、以下の二点があげられよう。第一は、いまだ全学的な広がりが見えておらず、参加するのが一部の学生にとどまっている現状をどのように改善していくか、という点である。学内ポータル等で本プロジェクトへの学生に広く呼び掛けたものの、結果としては教職員の既知の学生が中心に参加する結果となった。今後においては、参加学生の輪をいかにして拡大させ、本プロジェクトを継続させていくかが問われることになろう。

関連して第二は、苗植えや収穫の

局面では一部の学生の参加がみられたものの、六月から一〇月にかけての水やりは御剣学区の関係者と教職員とを中心とする作業にとどまり、この時期にいかにして学生の参加を確保するか、という点である。特に八月と九月は夏季休暇中であり、大いに登校する学生は限られてしまう。こうした事情もあるなかで、今後は日頃の水やり等の地道な活動に対して学生参加を促す具体的な方法について、検討する必要がある。

ともあれ、本プロジェクトは少しずつ軌道に乗り、活動幅も広がっている。今後も可能な範囲で楽しみながら、活動を継続していきたい。決して無理はせず、身の丈に合ったかたちでゆるやかに取り組むことが、こうしたプロジェクトが長期にわたって継続する秘訣であるように思われる。

※本稿は平成二八年度名古屋市立大学特別研究奨励費「大学生の力を活かした御剣学区への地域貢献の可能性―学生・教職員・地域住民の協働による山の畑（はたけ）プロジェクトの実践」による研究成果の一部です。